

第2回 総合教育会議 議事要録

開催日時	平成27年10月21日(水) 午前10時から午後11時まで	
開催場所	はぐくみセンター8階 多目的講座室	
協議題	奈良市教育大綱について	
出席者	委員	仲川市長、杉江教育委員長、金春教育委員、畑中教育委員、中室教育長 (欠席：都築教育委員)
	事務局	【総合政策部】杉本参事、山岡総合政策課長補佐 【教育総務部】西崎部長 【学校教育部】梅田部長 【教育委員会事務局】北谷理事、石原参事、錦教育政策課長、小林教育政策課長補佐、塚原、牧野
開催形態	公開(傍聴人なし)	
担当課	教育委員会事務局 教育政策課	

議事の内容

【市長からの挨拶】

- 仲川市長 ○本市の教育委員会、又は総合教育会議には、専門の学識経験者、現場の教員経験のある委員、そして保護者の立場の方がおられ、ひじょうにバランスのとれた形になっている。
- 地域の町づくりや将来のビジョンを念頭に置いて、この町の次の時代の担い手をどのように育てるかということを意識して、教育政策に反映していくということが非常に重要である。
- 総合教育会議において、これまで以上に市長部局と教育委員会が連携を密にすることで、法制度や予算、部局をまたがった連携などといったことの実行力が高まっていく。

【教育委員長からの挨拶】

- 杉江委員長 ○第1回の総合教育会議では、市長をはじめ皆様が忌憚のない意見を交わすことができ、かなりの程度まで互いの認識を共有できた。
- 本日の主な協議事項は大綱についてである。今後、大綱を基に具体的な施策の策定に移っていくという大事な手順の始まりのところであるので忌憚のないご意見を頂戴したい。

奈良市教育大綱について

- 事務局 ○奈良県が作成を進めている大綱についてはひじょうに網羅的な内容であるが、本市では第1回会議で協議した方針に基づき、重点的な内容について記載をしていく。また、教育委員会で策定する「教育振興基本計画」は大綱と整合性のある構成とし、網羅的な内容を取り扱う。
- 第1章では、「大綱策定の目的」と、国や本市をとりまく「社会情勢の変化」として、「第2期教育振興基本計画」、また、「奈良市第4次総合計画後期基本計画」(案)等を参酌し記載。また、第2章の「重点課題」や「基本方針と施策の概要」と関連する資料を「本市教育の現状と課題」として掲載している。これら様々な課題に対応するための方針や施策について示したものが、第2章「大綱」である。
- 目標を「21世紀の社会をたくましく生き抜く人材の育成」と掲げ、期間は平成32年度までの5年間としている。
- 重点課題として「アイデンティティの確立」と「教員の多忙化の解消」の2項目を示した。これは、すべての基本方針に関連付ける必要があると考える。
- 基本方針は、第1回会議での協議内容に基づき、基本方針と主な施策について示している。
- 仲川市長 ○本日は「重点課題」についてご発言を頂きたい。
- 一つめのテーマは「アイデンティティの確立」ということ。

- 杉江委員長 ○大綱（案）の4ページにある「国際社会の一員としての自覚、豊かな教養、他国の異なる文化を理解し尊重する精神、日本人としてのアイデンティティなどの育成を推進することで、自分たちのまちである奈良に対する誇りと、奈良で学ぶ自分自身への誇りを培います」が非常に大切。
- アイデンティティという言葉自体がかなり曖昧であるが、子供たちが自らの学校生活の中で価値観を作っていくというのが大切であり、それを基にして社会との繋がりを意識し、全体としてのアイデンティティに繋がってほしい。
- 奈良にある伝統、文化、歴史といったものを、世界遺産や伝統文化が身近にある奈良の子供たちは、それらを身近に感じることができ、実際に触れながら勉強できるのは幸せである。
- 金春委員 ○アイデンティティという言葉は、曖昧だが誰もがある程度理解できる便利な言葉である。
- 大綱にアイデンティティという言葉を使うのであれば、市長がお考えであるアイデンティティとは何なのかを、保護者や市民が分かるように示していただくとありがたい。
- 教育では子供たちが主人公であるので、指導者たちは脇役に徹して、指導者である自覚、プロ意識を持って成し遂げるとするのが一番大事であると思う。
- 指導者が何を目的としているかという最終的な目的を持って、プロ意識を持って接し、子供たちはプロから学んだことを将来に繋げていくことができればよい。
- 「教師が嫌いだから、その教科が嫌い」とならないようなシステムが教育界では大事である。
- 畑中委員 ○子供たちには、自信を持って生きてほしい。
- 先日、海外留学に行った高校生の話を聞く機会があり、その高校生が言っていたのは、「同世代の諸外国の子が、自国や自分の住む町の事を自慢げに楽しげに語っているのを見て、自分はどれだけ日本の事、奈良の事を話せるのかということを感じた。」「日本や奈良は自慢できる良いところが沢山あるが、それを上手く話すこともできないし語学力も不足していると感じた。もっともっと歴史の勉強や語学の勉強をしなければならない。」ということ。
- これから海外に出た時や海外からのお客様を迎えるときに、若い世代の子には日本人の代表として話す機会が増えてくると思うので、日本人の誇りや奈良で学んだことの誇りを持ってほしい。
- 欧米人の仕草やテンポに憧れるということもあるが、海外の人達とたくさん接し、話していく中で、本来日本人が持っている仕草や心といった、奈良や日本の良さを子供に分かってほしい。
- 子供が日本のよさを知る経験をするために、保護者も一緒に機会を作っていくことが大切。
- 中室教育長 ○今の日本は高度経済成長期を経て、いわゆる成熟社会に入っている。高度経済成長期において子供たちにつける力は、与えられた課題を早く正確にこなしていくことであった。成熟社会というのは、価値観が多様化・複雑化し、変化も早い時代であり、言い換えれば、先が見えない予測困難な時代。
- そんな時代を生きる子供像として4つの子供像をイメージしている。
- 1 つめは、様々な知識や情報を取り出して繋げて活用していく、ICT を使いながら活用していくということ。
- 2 つめは、多様性の中で、色んな文化、歴史、価値観を持った人たちと協働して、協力してこの社会を作っていく力が求められる。コミュニケーション能力や、英語をツールとして使うといったこと。
- 3 つめは、目標や課題を見つけて、最後までやり遂げる力。誰かに与えられた目標ではなく、自分から課題を見つける力。我々はそういった力をキャリア教育によって付けたい。
- 4 つめは、奈良で学んだことを誇りに思うことを自らのアイデンティティとしてしっかりと持つこと。本市では世界遺産学習として進めているが、単に世界遺産だけを学ぶのではなく、それぞれの校区、それぞれの町の中の先人が大事にしてきたものを学び取って、その想いをしっかり

と汲み取る。そんな学びを深めていく事によって、奈良で生まれたり育ったり学んだりしたことが、外に出た時に自分の言葉として語れるのではないかと思う。

- 杉江委員長 ○本日ご欠席の都築委員からご意見を紹介させていただく。
- 精神分析的心理学の基本概念を作ったと言われるエリクソンの言葉をベースにしながら、「自分が自分であるという一定の自己肯定感を持つと共に自分が社会の役に立っていると存在意義を感じる自己存在感を持つということ、それは個としてのアイデンティティが確立することで初めて日本人としてのアイデンティティに向かうのではないか。言い換えると、世界の中の日本人としてのアイデンティティを育むためには、子供一人一人が自分に自信を持ち、家庭、学校、地域への帰属意識を発達段階に応じて高めていく。そのことによって、奈良や日本の歴史や伝統文化についての理解も深めつつ国際社会に生きるための広い視野を持つことができるのではないか。グローバル社会においても個の存在は大切である。具体的に言うと、家庭、学校、地域の日々の生活の中で子供の自己肯定感を育む教育を行うことが大切。また、自己存在感、つまり社会の一員として機能しているという意識を培うためには、家庭の手伝い、学校での委員会生徒会活動への参画、地域行事への参画などが大切だ。」というご意見であった。
- 仲川市長 ○重点課題で「アイデンティティの確立」というものが挙がってきた背景について事務局から説明をお願いします。
- 事務局 ○背景としては、世界遺産学習というものを奈良市オリジナルの取組として長く取り組んでおり、そこから学ばせたい事というのは、先人の営み、ただ単に1300年前のものが残っていることが素晴らしいのではなく、それを残してきた営み、そういった想いというものを通じながら、あるいは、世界遺産に関わらず各地域に残っている文化遺産なども人によって伝えられてきている、そういったものを素材として子供たちにその各地域、あるいは奈良が世界に誇る文化遺産、無形、有形に関わらず学ばせたい、ということ。
- 世界の中に羽ばたいていった時にしっかりと自分の中にベースがある子供たちであってほしい。そこには奈良で学んだこと、奈良で育ったことをしっかりと語れる力を養いたいというところにある。そういったことを総合的に勘案した中で、アイデンティティという言葉に集約している形になっている。
- 仲川市長 ○内容的な根拠はよくわかる。
- 国の学習指導要領の改定や教育再生実行会議など、政府の教育政策の大幅な方向性を見直しという文脈の中で、主体性やアイデンティティという言葉は出てくるが、これとは全く無関係なのか、国が言っているので取り入れたのか。
- 事務局 ○国を参酌していることに間違いはないが、市としてどう進めるのかという所に主眼を置いている。
- 仲川市長 ○「アイデンティティ」は解釈の幅があるので、どう定義するかというところをしっかりとしておく。
- まず、非常に変化の速い時代の中で、特に世界の中で世界との繋がりを意識して暮らしていかなければならない時代が来ている中において、我々はどういう強み、弱みを持っているのかという自己認識をするということが非常に重要であり、グローバル社会の中の個人、または自分の立ち位置を客観視する力が必要。資質、能力をどう高めていくかという方向での議論の中で、強み、弱みをどのように捉えるのかということが重要である。
- 自分のルーツや価値観に繋がっていくアイデンティティとして、奈良らしいアイデンティティ論をしっかりと議論して据え置く必要がある。奈良は異なる価値観を受け止め、受け入れ、調整をしていく、というしなやかさに強みを持った歴史的経緯のある町である。アイデンティティを確立したうえでどういった社会を作り、どういった能力が子供たちに必要なのか議論が必要。
- 多様性をどのように豊かさに変えていくかという部分において、様々な価値観をどう自分の知識

に変えていくか、という知恵の部分が奈良の持っている一つの強みであり、それこそが奈良的アイデンティティである。

○アイデンティティの定義において「個人としての個」、「我々という意味の共」、「より広いパブリックという公」の3つにおけるアイデンティティのイメージや指し示す範囲は異なる。教育大綱という中で、どこにターゲットを当てた位置付けをするのかを明確にしておく必要がある。

○それでは、2つ目の重点課題「教員の多忙化」について中室教育長より説明をお願いしたい。

中室教育長

○奈良市の教員の実態をアンケート調査した。昨年度9月には全ての教頭に、12月には、市立小中学校の教員1457名に、教員の職務についての実態調査を行った。その調査結果は、小学校、中学校で若干の違いはあるものの、ほとんど共通していた。小中学校ともに、最も時間的負担を感じ意義を感じにくいのは「国や県の調査」だった。次いで、時間的負担は大きいけれども意義は感じているのは小学校が「提出物の確認や成績判定」、中学校は「部活動の運営」であった。

○時間的負担が大きく、あまり意義を感じない業務を見直す必要があり、「断捨離」という言葉のもと、教員が子供と向き合う時間を確保する。教員の意識を変え、授業を変え、子供の学びを変えようと考えた。「断捨離」で業務を削減する一方で、学校を支援する学校運営サポートチームを立ち上げた。サポートチームには17人の再任用職員や校長OB、教員OBが入り、教頭の事務補助、情報管理、市教委からの書類の精査、部活動の支援、虐待や生活支援など11業務に対応している。

○アンケート調査からは、教育センターの教員研修に意義は感じているが、学校の日々の業務に追われてなかなか参加できないという実態も明らかになったため、我々から現場へ出向く個別研修も立ち上げた。その背景にあるのは、中堅教員の減少により先輩教員のノウハウを引き継ぐことができないという状況になりつつあるということである。

杉江委員長

○教員の多忙については、国によって教育制度が違うので、必ずしも日本の場合が拘束時間が長すぎるということにはならないかもしれない。

○教員も企業の従業員と同じで生産性を意識しながら業務を行う必要がある。つまり、効率的な仕事をしているかどうかを考え直すべきだ。

○教員の知識については、人工知能などの発展に追いつけなくなってしまうだろう。そうになると、教員は何を持って子供と接するのかということであるが、政治、経済、歴史、文化などのスパンが長い動きにもっと関心を持つ必要があると思う。つまり自己研鑽が非常に大切になってくる。教員に対する研修も大切だが、自分で学ぶということも大切である。

○教員としての仕事(役割)は、生徒たちに自分が研修で得た能力や知見を子供たちに伝えること。そのことによって、子供たちに先生に対して自分たちのお手本だという敬愛、尊敬の心が生まれ、子供たちのモチベーションが上がる、というのが教員に残された最後の仕事だと思う。

○都築委員からは、「教員が多忙のために疲弊しては子供に夢のある教育は行えない。教員には、心のゆとり、生活の充実、自己研鑽する余裕が必要だ」とのご意見を頂いている。つまり、人間味溢れる教員であって欲しいということである。また、「本当に多忙なのか、多忙感なのか、多忙の中身を知る必要がある。OECDのデータは中学校教員のみで、クラブ活動の時間が多忙の中で抜きんで多かったため、多忙という報道が目立っていたのではないか。」とも言われた。

仲川市長

○多忙感の問題は、中身についても議論が必要だし、改革も単純にはできないという意見を頂いた。

金春委員

○教員が、「一国一城の主」みたいなことになってしまうと、職場での孤立感が出てしまう。もちろん切磋琢磨して競い合うということも大切だが、同じ職場内での信頼関係の構築のもと、自分の限られた時間を上手く他の同僚や同じ科目の教員と共有できれば、教育技術の継承というところにも繋がってくるし、人を頼ることによって自分が助かったと思えば、それを糧にして今度は

自分自身が頼られる存在になれると思う。

畑中委員

○教頭先生はじめ、先生方のお仕事の内容について細かいところまでわかりにくいところもあるが、保護者の目線で見ると、教員の本来の仕事である授業づくりや学級づくりにかける時間や労力が損なわれているという心配がある。先生方が授業以外で子供たちとじっくり話す時間をもっと取れば、先生と子供の信頼関係がより深まると思う。

○保護者の役割も大変大きいと思っており、学校行事の手伝いや環境整備という所は大変大事な仕事である。保護者に「先生方を応援していく」という考えが根付いていくというようにすることが大切ではないか。

仲川市長

○現実問題として多忙であるということは、市教委事務局や現場の教員からも挙がってきている。一方で、多忙の中身について、「多忙であること」と「多忙感」は似ているが若干違っており、現状をしっかりと押さえていくことが大切。

○教員自身が心にゆとりがあって夢を語る魅力的な人物でなければいけないというご意見もあり、仕組みとして学校がどういった対応をできるかということと、地域や保護者からのサポートなど、どこか一つだけで解決しようということではなくて、それぞれ持ち場ごとで対応ができる部分があるのではないか。これについて、市でも具体的な方策を研究したり、モデル的な取り組みをしたりしているので、効果検証をして、より適切な方法を探っていくことが大切。

○他にご意見はないか。

杉江委員長

○全体的なことに関わってであるが、奈良市教育大綱が策定された後は、奈良市教育振興基本計画の策定に移らなければならない。教育委員会だけでなく市長部局の関係者の方々とも連絡を密にしながら、パブリックコメントを実施していく。その後、来年早々にでも教育振興基本計画ができればというスケジュールで進みたい。

○これまでの奈良市教育ビジョンでは、「知・徳・体」という従来からの教育三原則に加えて、「夢・誇」という表現で捉えている。本日も、このことを踏まえたご意見を頂いていたので、取り入れて作成を進めたい。

仲川市長

○スピード感を持って新しい教育施策を展開しているが、国でも色々な議論が活発であるので、市としても教育に関わる「教育ビジョン」のようなものが複数あるというのも整理に困るだろう。また、これまでの経緯もあるので、どういう取りまとめがよいか、ご意見をいただきたい。

中室教育長

○継続していく部分もありながら、市長に大綱を定めていただき、それを受けた形で教育振興基本計画という具体化したものがあればいいと思う。

仲川市長

○今回の大綱と教育振興基本計画で包括するというようなイメージで、今までの議論も取り込んで一本にまとめるということか。

杉江委員長

○そういうことである。

仲川市長

○これまで、皆さんの中での色々な議論の経緯があると思うが、今回、国の制度も変わったということで、改めてもう一度大きな方向性を整理する主旨で総合教育会議も開いている。今まで出てきたものも吸収できるものは吸収し、一本化して内包するという進め方を進めたい。

○大綱について、大きな柱立て、項目、展開方向について、お示ししたものでよろしいか。

各委員

○異存なし。

仲川市長

○表現等の修正の加わったものにつきましては追って事務局からお示しさせていただく。

○本日の議事全て終了となりますので、事務局にマイクをお返しする。